保育者養成校における「幼児の活動の総合的な理解」を促す授業の工夫
－ 領域「環境」「表現」の連携授業から見えてきたこと －

An Attempt Improve Classes to Promote "Comprehensive Understanding of Young Children's Activities" at Childcare Training Schools: Insights from Interactive Classes across the Teaching Domains of "Environment" and "Expression"

梅田 裕介[1)]　安田 万里子[2)]　西垣 吉之[1)]　横山 麻弓[3)]

UMEDA Yusuke, YASUDA Mariko, NISHIGAKI Yoshiyuki and YOKOYAMA Mayumi

抄録：保育では、幼児の姿や活動を、５領域を窓口にして一体的・総合的に捉えることが求められている。しかし、現行の保育者養成課程の領域別の授業では、学生が前述の捉える力を身に付けることは困難と仮説を立てた。そこで本研究では、保育活動では５領域が相互に関連しているという感覚を学ぶために、身近な音に着目し「環境」と「表現」の連携授業を実施した。その結果、連携することで学生にとって従来は別々の授業としか捉えられなかったものに、相互に関連する要素が存在することを理解するとともに、幼児の活動を理解する際に、単一領域からでなく、領域の枠を超え総合的に捉えることの重要性に気付くきっかけになった。また、幼児の活動を多様な視点で捉える力の醸成や幼児の活動を理解する上で何が大切かを考えることに繋げることができた。さらに、養成に携わる教員の幼児教育に対する基本理解の重要性についても示唆を得られた。

キーワード：領域「環境」、領域「表現」、連携授業、総合的、養成校のカリキュラム

Ⅰ．研究の背景

幼稚園や保育所、認定こども園等での保育においては、３つの資質能力を一体的に育むことが求められている。そして、それら資質能力を幼児の発達に基づき具体化し、育ちを読み取る窓口として整理されたものが５領域とされる。この５領域について 2018 年保育所保育指針解説では「遊びや生活などの子どもが身近な環境に主体的に関わる具体的な活動を通して、各領域の内容を総合的に展開し、幼児期にふさわしい経験と学びを援助（下線は筆者による）」[1)] することが求められているとされる。「一体的に」「総合的に」という文言から、保育者は領域に掲げられるねらい・内容を個別に取り上げ指導・援助するのではないこと、また、園内で展開される様々な活動において各領域の内容に記載されている項目を経験することでねらいに迫ることが可能になることから、一つの活動を評価する際、それらの内容が絡み合いながら幼児の育ちが保障されているという視点をもって評価することが求められていると解釈できる。『幼児理解に基づいた評価』（2019）でも、保育者は「幼児の変容を温かく見つめ、幼児のよさと可能性を発揮する姿を大切にすると共に領域に示すねらいの視点をもち、その幼児の全体的な発達の状況を捉え…（後略）」[2)] とされ、指導・援助・評価の際は、一領域のみに着目するのではなく、５つの各領域に記載されるすべてのねらい・内容を念頭に置きながら、時にそれらを絡ませる視点をもった上で保育を組み立てたり、評価したりしながら、幼児の「全体的な発達」を促すことの必要性が訴えられているのである。

現在の保育者養成は「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が新設され、その中に「領域に関する専門的事項」並びに「保育内容の指導法」が位置付けられる構成である。神長美津子（2017）は、保育者は５領域に関する専門的知識と、幼児理解・指導計画力・実践力・教材開発力などの２側面が重要であり、従来の教職課程においては教科と指導法に関する科目の関連が見えにくかったため前述の新設に至ったとしている[3)]。ここから専門的事項と指導法が乖離したものとして存在してはならないこと、つまり、専門的知識と指導法を関連させながら授業を構

1）教育学部子ども教育学科　2）中部学院大学非常勤講師　3）子ども家庭支援センター　ラ・ルーラ チーフ保育士

成することが望ましいと解釈できる。同時に幼稚園教諭１種免許状に係る教職課程では、５領域すべての科目の開設は必要であるものの、これら「領域に関する専門的事項」「保育内容の指導法」の最低修得単位数は定められておらず、「複数の領域や、領域に関する専門的事項と保育内容の指導法の両方の内容を含めた複合的な科目を開設することも可能」[4]となっているのである。湯地宏樹・髙丘有季乃・湯地由美（2022）は、保育者や学生が「資質能力」「５領域」等をどう評価し、それらをどう関連付けているかについて調査を行った。結果、経験年数の積み重ねによりこうした育ちを読み取る力が育まれていくこと等に触れた上で、養成校段階から幼児の育ちを読み取る力を養い、５領域等の内容と幼児の育ちを関連付けながら総合的に捉える力を育む必要性を言及している[5]。

養成校においても、保育活動では、５領域が相互に関連しているという感覚を育んだり、幼児の姿から５領域の育ちを総合的に読み取ったりする力の育成が求められているといえる。教職課程の改訂によりその足場ができつつあるものの、他大学のシラバスを俯瞰したところ、それらの科目名の例を挙げると「幼児と健康」「子どもと環境」「人間関係指導法」のように、結局は５領域を個別のものとして取り扱っている実態が多いように感じられる。

Ⅱ．研究目的・方法

現行教職課程においては「保育内容総論」のように各領域の関連や繋がりを学ぶ科目はあるものの、研究の背景にも示したように、いくつかの領域を横断的に捉えた科目や、専門的事項と指導法の両方を含めた科目等はあまり存在していない。そのため、養成校段階で５領域の育ちを一体的・総合的に関連付けながら幼児を読み取る力や、活動において各領域をまたいで保育活動や幼児理解を深める力の育成については課題が残ると推察する。

そこで本研究では、領域環境の中でも、表現と関連付けることや学生にとって遊びへの発展のイメージがわきやすいと考えられる「身近な音」に着目し、本学における領域に関する専門的事項に関する科目である「幼児と環境」と保育内容の指導法に関する科目である「保育内容（音楽表現）Ⅰ」の連携授業を試行的に行う。「保育活動では、５領域が相互に関連しているという感覚」の育成を主軸とし両科目を往還した授業実践での学生の姿、ワークシート、授業後コメント、成果物、発言、アンケート等より連携授業の成果と課題を検討し、今後の保育者養成におけるカリキュラムや各授業の在り方に関する示唆を得ることを目的とする。

研究方法は以下の通りである。まず両科目の担当者間で表１のようにシラバスを策定した。

表１　両科目のシラバスについて（両シラバスの関係部分抜粋）

2023 年度「幼児と環境」シラバス抜粋	2023 年度「保育内容（音楽表現）Ⅰ」シラバス抜粋
①乳幼児の音とのかかわり（1）-自然の中の音見つけ-（「保育内容（音楽表現）Ⅰ」との連携授業）	②生活の中でみつけた音の表現活動を楽器を通して考える（「幼児と環境」との連携授業）
③乳幼児の音とのかかわり（2）-身近なものを使った楽器づくり-（「保育内容（音楽表現）Ⅰ」との連携授業）	④手づくり楽器を用いた表現活動の実践Ⅰ　演奏の計画を立てる（「幼児と環境」との連携授業）
	⑤手づくり楽器を用いた表現活動の実践Ⅱ　演奏発表・振り返り（「幼児と環境」との連携授業）

表２　各授業で得た分析材料

2023 年度「幼児と環境」収集データ	2023 年度「保育内容（音楽表現）Ⅰ」収集データ
①　授業後コメント・ワークシート	②　授業後コメント・ワークシート
③④　まとめて授業後コメント	
	⑤楽器（成果物）・授業後コメント・事後アンケート

各授業で得た分析材料は表２に示している（①・③④・⑤の授業後コメント、事後アンケートは Google フォームで回答を求めた）。これらに合わせ、授業担当者が記録した学生の姿や発言、写真も分析材料とする。授業がすべて終了した後、得られたデータ・材料について担当者並びにそれ以外の複数教員により考察し、研究目的について検討する。なお、倫理的配慮として学生には授業①の冒頭にて、連携授業や本研究の主旨について口頭にて説明した。授業の参加や成績に係るワークシート等の提出については必須であるものの、事後アンケート等の研究に関するものについての提出は任意とし、提出をもって研究に同意したものとみなすこと、また、収集したデータ・材料については個人が特定できないように処理し、本研究以外には使用しないこと等も許諾を得た。

Ⅲ．連携授業について

１　履修者等のデータ

本授業実践対象科目は、本学教育学部子ども教育学科１年生前期科目「幼児と環境（担当教員：梅田）」「保育内容（音楽表現）Ⅰ（担当教員：安田）」である。両科目ともに他コースの学生や上級学生の履修があり受講者数がそれぞれ異なる形となったため、両科目を共通に受講している学生 51 名を対象とした。

２　結果及び考察

（1）授業①について【幼児と環境】

本授業では、今までの「五感を用いて環境（対象）と関わる価値」について再確認をした。その後はフィールドワークとして学外（隣接する自然豊かな市民公園）に出かけフィールドビンゴ、サウンドマップの２つの活動を行い、再度教室に戻り振り返る形をとった。フィールドビンゴとはゲーム感覚で幼児が五感を用い遊ぶビンゴ活動である。通常のビンゴと異なって各マスが体験内容になっており、その体験をしたときに〇が付けられる。今回のカードでは嗅覚や触覚のみならず、「かぜのおと」「とりのこえ」といった自ずと音に意識が向けられるよう作成した。フィールドビンゴに関しては、梅田裕介（2018）「学生の体験を重視した領域『環境』の指導に関する一考察―マインドマップの分析から―」[6)]にて具体的に教育効果等を示している。サウンドマップとは聴覚を研ぎ澄まし、音を通して自然を感じ、自身も周りの自然に溶け込むことを楽しむ遊びである。いわば自分を中心にどこからどんな音が聞こえてきたかを示す「音地図」づくりである。幼児であれば、聞こえた音をニョロニョロやグルグルといった記号風に表現し、音そのものを表現することを楽しむだろう。そのため学生においても「風の音」や“虫のイラスト”等の文字や絵による表現ではなく、“感じたまま”に好きなように表現すること、考えずに聴くこと自体を楽しみ、“直感的に”記入することを大切にするよう事前に伝えた。表３は授業後コメントである。

表３　授業①の授業後コメント

今日の授業の感想や学び（抜粋）
・普段音を気にして無かったので何気ない音でもこんな音してたんだと改めて思いました。 ・自分が普段感じている音以外にもたくさんの音が身の回りに沢山あるんだということがわかりました。これから外に出た時などに意識して耳をすましてみたいです。 ・耳をよくすますと色んな音があることに気づけて、その聴こえる音はどこからで何の音か考えたりして楽しかった。 ・自分の普段感じないとこを刺激されているような感覚で気づかないことにも気づけたりして面白かったし、幼児期からこのような五感を使うような体験は大切だなと身を通して感じました。 ・この年齢になっても新たな発見があると言うことは、子どもたちは新たな発見の連続なのだろうと思った。 ・五感を使って活動していたら、なんだかリラックスできた。五感を使うと心が豊かになるのを感じられた。 ・自然の中にいろんな音があるのが楽しかったです。 ・同じ自然物でも方法によって奏でる音が違うことに不思議さや美しさを感じました。（木の枝→折る、裂く、叩く） ・自然にはたくさんの音があるんだなと思いました。いつもなら音がしてもうるさいなとか騒音として捉えていたけど、意識して聞くと自然にはたくさんの音があってその音で自然の大きさなどがわかりました。 ・耳を澄ませば澄ますほどたくさんの音が聞こえること、ひとつに集中すると、その音が大きく聞こえることが自然ってすごいなあと思った。音に集中しているとその音に飲み込まれそうになったから自然って凄く大きいんだと改めて思った。 ・今日聞こえた自然の音は明日は必ずしも同じ音は聞こえない。偶然の音。瞬間の音。その音によって子どもは色々な心の動きをすること。また天気によっても聞こえる音が違うとこも美しいと思う。

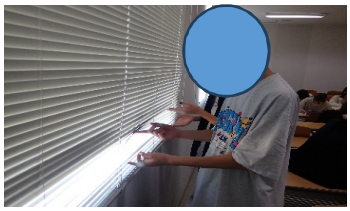

図１　ブラインドで音を出す学生

授業後コメントからは、普段気にしていないものに目を向けることの面白さ（下線　　部分）や、これをきっかけに音を意識して生活してみたいという今後に繋がる意欲（下線　　部分）が多く見られた。また幼児期に目を向け、こうした聴覚を活用した活動を幼児期に行うことの意義や、ここから幼児にとってどのような育ちに繋がるのだろうと考える学生もいた（下線　　部分）。特に、最後の「偶然の音」「瞬間の音」という表現は、音は不変的なものではなく今この瞬間を楽しむものという豊かな見方が表れており、学生のこの捉えからは、今この瞬間瞬間で感じた心の動きを大切に遊びに取り組む幼児そのものの見方に近い感覚の育ちが読み取れた。「同じ自然物でも方法によって奏でる音が違う…」という学生は、既に自ら音を生み出すという方向へ気持ちが動いており、同じものでも素材との向き合い方によって音が変わることに気付き、それを自ら楽しむ姿があった。本活動が学生にとって音やその向き合い方に興味をもつきっかけになったと推察する。

教室に戻り本日の交流と価値付けを行った。学生が身近な音を自然に感じ取って心や体が動いたように、幼児も身近な音という環境を自ずと受け止める中で、それをきっかけに一人ひとりが多様な心の動かし方をすること、今回「聞こえてきた音」は、ある環境下において意図しなくても自ずと耳に入ってくる音であるが、幼児の中には自分もその音を再現しようとしたり、身近なものを使って音を生み出したりと、自分から環境に関わることによって作り出す音、つまり音遊びにも繋がっていくこと、などである。すると学生の中で自ら音を生み出す姿が出てきたため、「身近な物を使って音を出そう！」という活動で締めくくった。手をたたいたり、ブラインドをザッとしたり（図１）する活動へと展開した。本授業では身近な環境という視点から「音」への興味関心を高め、聞こえてくる音を楽しむ心と、自分から音を生み出す喜びを幼児の目線に立って感じられたのではないかと考える。

（2）授業②について【保育内容（音楽表現）Ⅰ】

本授業では、初めに前回の幼児と環境の振り返りを行い、学外で聞こえてきた音の再確認をした。このように「自

然に聞こえてきた音」ではなく、本時では授業①で学生が興味をもった「自分から環境に関わることによって作り出す音」に興味がわくよう展開した。自分の体を使って／教室の中で／持ち物を用いて／自然物を持ち込んで鳴らすなど、音を鳴らす活動を数多く行う中で、学生からは「足を踏み鳴らす」「体の様々な部位をたたく・こする」「筆箱を開ける」「鉛筆で机をたたく」等、自ら環境に関わる中で多様な音が生み出された。最初は受け身的に聞こえてくる音を楽しむ姿から始まり、徐々に音を出す喜びや、用いる素材（環境）及び表現方法を工夫することで自ら音を作り出し表現する楽しさへと学生の気持ちが動いたと考えられる。次に教員から「保育現場では子ども達はどうやって音を生み出すことを楽しんでいるだろう？」と問うと、「楽器！」との声が挙がった。そこで、教員から保育現場で活用される楽器に関する説明を行った。楽器そのものが振動して音を出す体鳴楽器・強く張った膜に振動を与えて音を出す膜鳴楽器・管などに空気を送り込みその空気の振動によって音を出す気鳴楽器等があり、振って鳴らす楽器・ひっかいて鳴らす楽器等、奏法も様々であること[7]を伝えた。こうしたことを認識した上で、幼児との音遊びに活用できるよう、幼児と環境でも触れた身近なものを活かした楽器づくりに繋げた。表４は授業後コメントである。

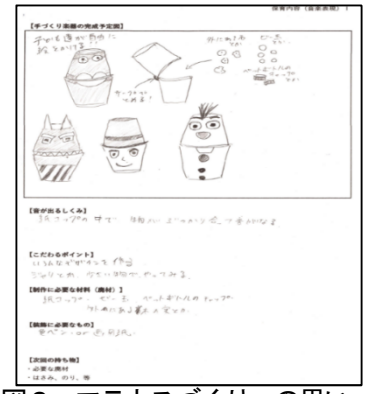

図２　マラカスづくりへの思い

表４　授業②の授業後コメント

今日の授業の感想や学び（抜粋）
・普段、あまり気にしていない音について考えることができた。どこからどんな音が聞こえるか、どんなことをすると、どんな音が鳴るか考えることができて良かった。 ・自然に鳴っているものもあれば、自分で鳴らせるものもあり、たくさんの音に関わって生活していると感じました。 ・もっと身近なもの、音を気にかけて生活してみようと思った。 ・音と聞くと、楽器、というイメージが強かったが、身の回りは音であふれているということを改めて知る機会になりました。 ・自分で音を鳴らしてみる時に、使う道具やたたく強さによって、音や大きさが全然違うな、と思いました。 ・自分の体を使って鳴らす音では、音だけでなく、自分の体にも触れるため自分の体について知る機会にもなるのではないかと思いました。そしてこれは、自然物で音を鳴らす時にも同じことが言えると思いました。音だけでなく、他の物も関連させて活動できる保育を考えられる保育者になりたいと思いました。 ・今回の授業で、環境の時にやった外に出た時に聞こえた音を、少し前にやったことだけど思い出しながらできたので良かったです。 ・環境の授業で、廃材でいろいろなおもちゃ作りや遊びに活かせるということや音について学び、音楽表現でも、音や楽器について学んだので、楽器を作るのが楽しみです。 ・楽器でも、振る・はじく・ひっかく・こするなど、音を鳴らす手段がたくさんあるのだということを知って、とてもおもしろいと思った。 ・次の授業で作る楽器は、普通だったらゴミとして捨てられてしまうような廃材を生まれ変わらせて作るからステキだなと思った。 ・廃材を使いながら幼児が使った時に楽しめるよう、形を考えながら作りたいし、中に入れる物を何にするのか重さによって音の高さが変わったりすると思うので、よく考えて作りたいです。 ・１つの手づくり楽器で１つの音の出し方だけでなく、色々な音の出し方が出来る楽器を作りたいです。

授業後コメントや楽器設計図ワークシート（図２）からは、単に音を出すというだけでなく幼児と一緒に活動することをイメージし、楽しめる楽器づくりを考える姿もあった（下線＿＿部分）。ワークシートを記入する学生は素材選びの工夫や、「これならこんな音鳴るかなあ？」と友達と相談しながら考える様子もあり、自身の過去の体験と照らし合わせ、素材を「まだ聴こえぬ音」という切り口から捉える楽しさを感じていたのではと推察する。幼児の気持ちになり自分のこだわりをもって楽器を思い描く様子を、ワークシートや授業後コメント（下線＿＿部分）から読み取ることができた。さらにコメントからは、音と自分自身との関わりや鳴らし方の工夫について捉える学生（下線＿＿部分）が多く見られた。今回の授業では楽器づくりに繋げたが、「音と聞くと、“楽器”、というイメージが強かった…」という学生からは、幼児にとっては音でさえも遊びの一つとなるとの認識に繋がったと推察できた。また「廃材を生まれ変わらせる」「他のものも関連させ」「思い出しながら」（下線＿＿部分）との記述や、「外の砂を持ってきて入れてもいいですか？」という発言もあり、前回の幼児と環境の授業内容と今回の活動を学生自身が連動させ思考していると推察され、双方の授業内容が学生の中で自ずと繋がっていることが感じられた。

（３）授業③④について【幼児と環境／保育内容（音楽表現）Ⅰ】

本授業では、幼児と環境で学んだ身近な自然等を参考にして、身近な素材やその特徴を活かし、自分の思い描いた楽器づくりとその表現を楽しむこととした。学生の「こだわり」が見られた事例を以下に４つ示す。

Ａ：ティッシュ箱と輪ゴムでギターを作る学生。輪ゴムの張り方により「微妙に音が違うんですよ！」と発言し、張り方の微調整を繰り返す（図３）。
Ｂ：卵のパックでマラカスを作る学生。「最初の構造と変わった！最初は縦に棒を入れるつもりだったけど、横とかの方が音の高さが変わるかな」と、作りながら当初の予定を変更する。
Ｃ：でんでん太鼓を作った学生が数名いた。それぞれ紐の長さや紐の先の素材が違うため、友達のでんでん太鼓の音と聴き比べながら制作に取り組む。
Ｄ：水の入ったペットボトルにスパンコールを入れる学生。「水にスパンコールを入れた。鳴るのかなあ？」と発言する。

Ａ～Ｄは、まさに前回各自が考えた「この素材でこんな音が出るかなあ？」という自己課題を、それぞれが工夫して制作し「試している」場面である。Ａは輪ゴムの張り方による音の変化に気付き、Ｂは最初に思い描いた方法

より新たな方法の方が良いのではと作り方をその場で柔軟に工夫している。Ｃは同じ楽器同士を比べ、友達の作り方や音の違いに目を向け、工夫する姿が読み取れる。興味深いのはＤであり、Ｄはおそらくペットボトルに物を入れて振ると音が鳴ることは経験済みなのだろう。しかし、この学生のワークシートには「スパンコールが浮いた綺麗な状態を作りたい」と願いが記され、鳴らす子どもの様子をイメージして一種の実験をしていたと考えられる。予想した音と違う音が出た場合、その音を否定せず素直に受け止めて楽しんだり、イメージした音に近づけるために素材や量などを検討したりする姿もあった。

図３　ギターを工夫する学生

Ａ～Ｄの学生に見られたものは、試行錯誤したり他者の姿から新しい考えを生み出す喜びを味わったり、規則性や法則性（仕組み）に気付いたり、好奇心や探究心をもって自己課題に向かったりする姿である。これらは３つの資質能力に示された具体的な姿ではないかと考える。学生は幼児の気持ちになって体験する中でこれらの力を自ずと身に付けるとともに、実際、保育を進めていく上で、幼児の思考過程に寄り添う際に大切にしたい観点を、こうした学びの過程を通し獲得していると思われる。表５は授業後コメントである。

表５　授業③④の授業後コメント

今日の授業の感想や学び（抜粋）
・友達の作品は、私では考えられないような意見でたくさんの作品を作っていて、とても見ているだけで楽しかったです。次回は、交流し合ってみんなの音が聞けるのでとても楽しみです。セッションもやってみたいです！ ・音が鳴らなくても吹くだけで楽しい子はいると思います。でも、中には音が鳴るのを楽しむ子もいると思いました。なので、パイプオルガンを作りました。しっかり音が鳴りました。ドレミファソラシドと段々高くなるように作れました。自分で鳴らすのがとても楽しかったので子どもたちも楽しんでくれるかなと思いました。 ・音が出るものを作ることによってどうすれば音が出るのかもっと高い音、低い音が出るにはどうしたらいいのかなど工夫してできて楽しかったです。他にも保育者が道具に必要な物を準備しておくことの大切さを作りながら学ぶことが出来ました。 ・自分で考えて、自分で作るのはすごく楽しい事だと改めて知れました。また、本来なら捨てられてしまうような廃材でも子どもの遊びに使えるのが素敵だなあと思いました。どうしたら音が違うように出て楽しいかを考えるのが楽しかったです。 ・家でいつもは捨てるものを１週間残しておいてもらって使えそうなものを持ってくると、思ったよりたくさんありそれが可愛く楽しめる楽器になるのが素敵だと思いました。廃材にひと手間加えるだけで、子どもが好きそうな音が鳴ったり、見た目がかわいいようなものができて、作るのもたのしかったし、音を自分で鳴らしてみるのも楽しかったです。ビーズの量や大きさで音が変わることもあり、その違いを比べて色々作るのも楽しいかなと思いました。 ・石を入れる数によって全然音が変わるという事にびっくりしました。小さい子が怪我しないように角を丸くしたり、テープで止めたりしました。 ・部屋中にいろんな音に溢れていた。音を鳴らすためにたくさんの音の鳴らし方があった。普段使っているものが音になるものに変わっていく様子が面白かった。

授業後コメントからも、活動時の姿に表れていたように、音をどのように自分のイメージ通りに鳴らすかという工夫に焦点を当てる学生（下線＿＿部分）が多く見られた。一方、素材（環境）は関わり方によって音が出るものに変化し、それを利用した表現素材にも変容する可能性があり、そこから領域の繋がりを直感的に捉える学生（下線＿＿部分）や、廃材の変化や工夫という領域環境の内容から捉えた見方（下線＿＿部分）、あるいは「音が鳴らなくても吹くだけで楽しい子はいる」や交流して皆で音を聴き合うことや演奏することへの期待（下線＿＿部分）という領域表現の内容から捉えた見方といった２つの領域の学びを学生は同時に体感していると考えられた。さらに自身が保育することを視野に入れ、幼児が楽しく遊ぶ姿をイメージし、保育者がどのような環境構成や安全管理をすべきかについても言及している学生（下線＿＿部分）もいた。授業③④では、前述のように環境と表現の内容双方を頭に置き、まずは最初の「やりたい」という課題に向け工夫し、その環境が学生に返してくる反応や変化を受け、さらに興味や自己課題をもつ（学びに向かう力）という、「自己の関わりや工夫による環境の変化」に興味を向ける姿や力が育ったと考えられる。こうした力は幼児においても大変重要であることはいうまでもない。

また今回は、学生が教員の想像を超える意欲にて授業に臨み、多様な工夫を取り入れ楽器づくりに臨んだため、シラバスに示す授業④の演奏の計画立案まで至らず、授業③④連続にて楽器づくりとなった。ゆとりあるシラバス作成をはじめ、教員自身も「幼児の思い」を大切にする保育の構えを有し、時にシラバスにとらわれず柔軟に授業を工夫して行う必要性についても改めて考えることができた。

（４）授業⑤について【保育内容（音楽表現）Ⅰ】

ここまでの研究や学生の姿から考察する中で、環境と表現のみならず、筆者は学生にとって他の領域に関する育ちや学びにも大きく繋がっていると感じた点が多々あった。例えば、授業①の友達同士でコミュニケーションしながら音を生み出す姿（＝人間関係／言葉）や、授業②で身体全体を動かして音を出す姿（＝健康）、授業③④で友達の楽器と比べる姿（＝人間関係）などである。そこで本授業では表６に、授業の流れと学生の姿や育ちの読み取り・関係する領域等を対応させ整理した。中央列**太字**で示す体験・育ちが特に右列領域と関わる部分である。

表６を見ると、先に述べたように環境や表現の授業（それに関する活動）であるにも関わらず、学生に見られる姿やその育ちは、５領域に含まれる要素が関係していることが推察できる。興味深い学生の姿として、ペット

表６　授業の流れとそこでの教員による学生の姿や育ち等の読み取り・関係する領域

授業の流れ（中心活動に下線）	学生の姿・体験内容・育ち〈教員の読み取り〉	関係する領域
Ａ：完成した楽器を一人ずつ鳴らしながら発表し、こだわりのポイントを発言した。	・（見ている学生に教員が「どんな音が出るか想像できる？予想した音だった？」と問いかけることで）音の鳴る**仕組みや素材による音の違い**、同じ楽器でも**作り方によって音が違う**ことなどを考えた。	・環境／表現／人間関係
Ｂ：近くの友達と楽器を交流した。	【Ｆの項にまとめて記載】	
Ｃ：自分で作った楽器でリズムや音遊びへの興味を引き出すために、まずは教員がいろいろなリズムのパターンを提示し、そのリズムで自分の楽器を演奏するリズム遊びを行う。	・今までの単発の音や短い音が、長い音になったり**意図的に工夫**して繋げたりすることで、**一つの音楽を形づくっていく楽しさ**を感じた。 ・提示されたいくつかのリズムを体験し、自らの楽器にて**生み出されるリズムと奏法の可能性**を感じた。 ・**今までは個別**に音を鳴らしていたが、初めて**複数人で同時に音を鳴らす体験となり、コミュニケーションを楽しんだ**り、**多様な素材・奏法で演奏された楽器による音の重なりを楽しんだ**りした。 ・教員のリズムとは異なる**自由なリズムを作り出すことを楽しむ**学生の姿も生まれた。**身体全体を使って表現することを楽しむ学生**もいた。	・表現 ・表現 ・人間関係／表現／言葉 ・表現／健康
Ｄ：自分の楽器の音の特性に合ったリズムづくりへと発展させた。具体的には、手拍子８回分の長さ（♩×８回分）でリズムを作る。	・短いリズムを刻みやすい・長く鳴らし続けられるなど、**それぞれの楽器の特性を活かそう**とした。 ・マラカスを作った学生は、１回だけ振って短い音、連続的に振って長い音を鳴らす工夫をするなど、**自らの楽器の特徴・素材の特徴をよく捉え、表現の幅を拡げ、自身の楽器について学びを深める**ことになったのではないか。 ・**学生同士で、リズムを繋げる**姿が生まれ始めた。**「～～みたいな音」という発言**が多く見られた。	・表現／環境 ・表現／環境 ・人間関係／表現／言葉
Ｅ：上記を６～７人のグループの中でリレーして繋げて発表する。	・それぞれが**作り出したリズムを繋げる**、つまり、一つ一つの楽器とその音色やリズムが**連続し、一つのまとまりあるフレーズが生まれる過程に心を動かす**ことになったのではないか。	・表現／人間関係／言葉
Ｆ：自由に席を立って友達の楽器を見たり鳴らしたりする。	・**友達の楽器を見ることで新しい奏法や音、素材による違いに気付き、楽器や素材に対する理解・可能性を深める**ことに繋がったと推察する。 ・楽器は一緒であってもたたく**素材を交換して交流しながら音の違いに興味を向ける**学生（図４）や、空き箱ドラムのリズムに合わせて**周りの学生が各々加わって演奏する姿**が見られた。	・人間関係／環境／表現 ・人間関係／環境／表現／言葉

ボトルマラカスを作った学生が数名おり、丸い容器に素材を入れてマラカスを作った学生もいた。これらの学生同士で工夫・相談をして、ペットボトルマラカスを並べ、丸いマラカスを投げるというボーリング遊びへと発展させる姿があった（図５）。学生はボーリング遊びの楽しさだけでなく、転がる時に鳴る音や、ペットボトルが倒れた時に生まれる音という「遊びの中で生まれた音」をも楽しんでいた。ここからは他領域の育ちのみならず、幼児が環境に関わることで変化する様子を受け止め次々と行動を変容させていく特性を、こうした活動を通して実感していることが分かった。また、先に述べたように本活動においても３つの資質能力に関する育ちをも学生は体感していることが読み取れる。これらの見方・考え方は、幼児の活動を読み取る際の基盤にもっていてもらいたいものであり、これらの授業を通して学生に自ずと育まれたのではないかと考える。表７は授業後コメントである。

表７　授業⑤の授業後コメント

本日の音を鳴らしたり、友達や周りの音を聞いたりした活動の学びや感想（抜粋）
・自分で作った楽器で音を鳴らすのがとても楽しかったです。周りの音と重なることで、色々な音がなってとても楽しかったです。 ・周りの子の楽器を見て、色々な音の出し方があるということを知ることが出来た。 ・マラカスを作る人は沢山いたけど、中に砂を入れたり、石を入れたり、草、ビー玉、ビーズなど色々なものを入れててその入れる物によって微妙に音が変わったりしていてとても面白かったです。 ・同じペットボトルでもたくさんの音が生み出されていてとても面白かったです。自分の作った楽器でも思い描いていた音以外の音も出てたくさんの楽しみ方がありました。 ・友達の音を聞いてこんな音もするんだとびっくりしました。 ・同じものを使っても同じ音が出るとは限らないことがわかった。音を出すときは皆楽しそうに出していた。石一つ取っても中に入れて音を出したり、叩いて音を出したりと色々な音の出し方があって楽しかった。 ・身の回りのものを使って作ったもので音を鳴らすと、子どもたちもいつもと違う音を楽しめるのでいいなと思った。音の感じ方が人によって違うから、楽しみ方も違うんだなとわかった。 ・叩いたり、鳴らしたりするだけでなく、息を吹き込んで音を鳴らすのが面白いと思った。 ・ひとつのものでも２つ以上の音の鳴らし方があったりと様々で興味深いと思いました。 ・作った楽器は音を鳴らすだけに留まらず、違う遊びにも使えて、なんでも遊びに繋げられて面白いと思いました。

授業後コメントからも、活動時の姿に表れていたように、音の重なりや繋がりを楽しむ姿（下線　　部分）や、交流による他者や他者の楽器・素材の工夫や違いに気付く姿（下線部分）が多く見られた。「同じペットボトルでも…」「同じものを使っても同じ音が出るとは限らない…」との記述より、同素材でも工夫次第で多様な表現に繋がる気付きを得たと考える。また、「身の回りのものを使って作った…子どもたちもいつもと違う音を楽しめる」「作った楽器は…違う遊

図４　友達の楽器に触れる

図５　楽器ボーリング

びにも使えて…」という学生（下線　　部分）からは、前述のようにまさに環境である身近な素材自体が、時には表現に使える素材となったり、遊びに繋がる素材となったりと、学生には環境や表現、さらにその他の領域や資質能力という多様な見方で活動を見る力が醸成されたのではないかと考える。

（5）事後アンケートの結果から

事後アンケートからは、図６の結果が得られた。それぞれ５段階尺度で質問した。結果どの質問に対しても、１～３のネガティブな回答は見られず、すべて９割近くの学生が５と回答をした。連携授業を行うことで、学生自身が保育の学びをより深めることができ、それぞれの領域ごとの学びをも促進することに繋がったと考える。

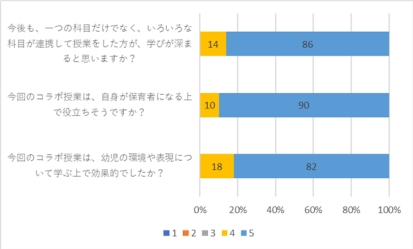

図６　事後アンケートの質問結果

表８の自由記述においては、「学びの繋がり（＝領域の繋がり）」に触れる記述をする学生（下線　　部分）が多く見られた。その中で、領域は分けて考える概念ではないことや、一見関係のないように捉えられる「環境」と「表現」であっても具体的な活動に取り組むことで、そこに様々な繋がりの要素が存在することへの気付きや、幼児の育ちがこうした複数の活動を通して、相互に関連しながら育まれていることについて、“連続的”という言葉を用いて表す学生もいた。また、「実際の保育現場でも」「科目が分離しているから保育現場での活用の仕方がわかりにくい」等の記述（下線　　部分）からは、今回の授業と実際に自分が保育現場に就職した時とを結びつけて捉え、実践的で総合的な授業によって、より学生が保育活動を考える力や幼児の姿を読み取る力のきっかけを作ることになったと考える。さらに、保育者としてどうあるべきか（下線　　部分）についてまで言及する学生も存在したことも成果の一つといえよう。

表８　事後アンケートの自由記述内容

コラボ授業全体を通しての感想・学び（抜粋）
・今までは環境は環境、表現は表現と分けて考えていたけれどフィールドビンゴや楽器作り、演奏、仲間との交流などを経て周りの環境には様々な音に溢れていることやそれらを自分なりに表現する方法がたくさんあることを知ることができました。またコラボを通して遊び、学びは繋がっているのだということを感じました。
・繋がる部分が見えてきて楽しかった。実際の保育現場でもこのような繋がりが重要だということが感じられた。
・それぞれの科目で勉強しているだけだと実践的なことができなかったり、科目が分離しているから保育現場での活用の仕方がわかりにくいですが、コラボ授業で実践的な活動ができて楽しかったです。
・関係がない授業だと思っても、遊び、活動の中で繋がっていることがあると知った。子どもの気持ちになることは大切だと思った。
・廃材の可能性や、自然物を使った遊びについての理解が深まり、環境構成の重要性をより感じました。子どもと同じ立場になって楽しむことが、保育者として大事だと思いました。
・コラボ授業を通して、保育者は多彩な遊びを知っており、遊びを一緒に楽しむことができることが大切だと学びました。
・一連の保育の流れについてもより分かりやすく捉えることができたため、今後もこのような授業を続けてほしいです。
・環境と音楽表現を区別するのではなく、環境から身近にある音に気づき、そこから感じたことを言葉ではなく、音という方法で表現することにより、子どもの成長は、色々な場面で繋がっていることを実感した。子どもの成長は連続的におきていることがわかった。また、環境と音楽表現がどのように繋がっているのかを、他の人の考えや感じ方を知ることができ、子どもの気持ちを読み取るヒントになると思った。

事後アンケートからは、連携授業の可能性を感じ取ることができた。ここまでの結果・考察や前述の学生からのコメントや質問への回答から、環境・表現という「それぞれの領域の専門的事項や指導法に関する学び」も同時に育ち、また他領域との繋がり、そして本研究では具体的に触れてはいないものの３つの資質能力への繋がりも総合的に育まれたと考えられる。

Ⅳ．まとめ

１　連携授業の成果

本研究では、一領域でなく各領域の横断的な視点をもって幼児の遊びや活動に向き合うという保育者の専門性を重視し、カリキュラムや授業の在り方について検討した。まずは「保育活動では、５領域が相互に関連しているという感覚」を育むことをねらいとし、試行的に領域間連携授業を行った。その結果、連携授業を行うことで学生にとって従来は独立した授業としか捉えられなかった領域や指導法に関する学びが、関連する要素がある授業として理解できるようになり、双方の授業における学びが深まったことが成果として挙げられる。同時に、連携することで一つのものを多様な見方で見る力の醸成にも繋がり、学んだ知識を保育現場での遊びや活動を組み立てる力、幼児の活動を理解する上で何が大切かを考える契機にもなったと考える。

２　連携授業を行って「逆説的」に見えてきたこと

筆者らは当初、保育と５領域の関連を学生に教授する足掛かりとして「連携」という手法を考えた。実際、連携

したことで成果が得られたことは事実である。しかし、仮に連携しなかったとしても「環境」「表現」それぞれの授業の中で、“身近な音見つけから廃材での楽器づくり”という展開ができた可能性もある。そしてむしろ各担当者がそれぞれの授業で意識しさえすれば、学生自らが「保育活動は５領域が総合的に絡み合っていること」を実感できるのかもしれないと推測した。それは研究過程のⅢ２（４）項で示したように、どのような保育活動や体験であってもそこには５領域の育ちが必ず総合的に存在しており、教員が説明しなくとも学生は無意識にそれら各領域の内容を活動から感じ取っていたためである。同様に、音を思いもよらない言葉で表す姿、仲間の姿を見て取り入れる姿、仲間同士で相談しながら音を楽しむ姿、こんな音を出したいと工夫する姿、自己の遊びの目的達成に向けて思考する過程を楽しんでいる姿、素材を工夫したり他の学生と相談したり、授業をきっかけに自ら行動を起こす意欲的な姿など、学びの姿勢として望ましい姿を確認できた。これらは先に述べた３つの資質能力に関するものであり、こうした育ちも無意識に学生は感じ取っていたと考えられる。

以上からは、連携授業を行ったことで逆説的に、本来は連携授業などという複雑なプログラムを組まなくても、それぞれの教員が幼児教育においては、“活動を総合的に展開する”ということを真に理解した上で、５領域の繋がりや資質能力の繋がりを学生に丁寧に紐解けば同様の成果が出せることが示されたと考える。ただ、先ほど教員が説明しなくとも学生は“無意識”にと述べたように、あくまで無意識である。保育者養成の授業でよく行われる事例解釈・解説や今回のような体験において、学生の解釈や気付きを自己の専門領域内の講義・演習だけで終始せず、各教員が５領域や資質能力と結び付けて学生へ返していくことが大切なのである。

３　保育者養成校の教員に求められる資質

研究目的は今後の保育者養成におけるカリキュラムや各授業の在り方の検討であったが、本研究では保育者養成校教員に求められる資質も同時に浮き彫りになった。前項のように各教員が５領域と結び付けて授業を行うためには、そもそも教員自身が自己の専門分野の理解だけに満足していては問題なのである。そうした保育者養成集団であれば、学生の各領域に関する育ちは深まっても、学生が卒業後に保育を行う際、小学校以降の教科教育のように領域を独立したものとして扱い、各領域のための活動を考えることになる可能性も出てくる。本来、幼児教育は幼児の特性に鑑み、幼児の実態から幼児の興味・関心を拾い、ねらいや内容、環境を考えることに特徴がある。となると、教員は自己の専門分野のみならず、保育全体の営みを理解しながら、常に幼児理解に迫ることができる力量が必要となる。また、何よりも本研究で対象としたような具体的な活動を通して自分の子ども時代を追体験しながら、「幼児と同じ感覚」をもち合わせる機会を学生時代に積み重ねることも重要であるだろう。つまり授業がたとえ領域別に設定されていたとしても、教員自身が「保育は５領域が総合的に絡みあって幼児は育つ」という感覚を常にもち、自身のすべての授業で５領域を意識し、幼児の活動の読み取りという観点から幼児の活動・育ちを繰り返し捉えていくことが求められると考える。そして、学生がまさに領域などを超えたところでも様々な経験や育ちをしており、それが幼児教育に携わった時のその学生自身の捉え方に反映するのではないかと推察できる。

保育は保育者のねらいに応じ構成されていくものであるが、活動が始まれば、その活動への具体的な取り組み自体に価値があるということを前提として、保育者は向き合うことが求められる。今回、担当教員は、学生が活動に向き合う姿を通じ、保育活動をどのように読み取るかを保育者目線・学生目線にて体験できたともいえる。また、学生の活動を肯定的に捉え、彼らが行っている活動自体の価値を学生に伝えることが重要であり、そのことが結果的に彼らが卒業後、保育を行う際のモデルとしての役割を果たすのではないかと実感した研究となった。

参考・引用文献

1）厚生労働省，保育所保育指針解説，フレーベル館，183，2018
2）文部科学省，幼児理解に基づいた評価，チャイルド本社，129，2019
3）神長美津子，コア・モデルカリキュラムの総論，無藤隆(代表)，幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～，10-13，萌文書林，2017
4）神長美津子，コア・モデルカリキュラムの総論，無藤隆(代表)，幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～，12，萌文書林，2017
5）湯地宏樹・髙丘有季乃・湯地由美，保育者や教員志望学生の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の評価に関する研究，鳴門教育大学研究紀要，37，313-326，2022
6）梅田裕介，学生の体験を重視した領域「環境」の指導に関する一考察―マインドマップの分析から―，中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究，4，1-10，2018
7）木許隆・高倉秋子・高橋一行・三縄公一，保育者のためのリズム遊び，音楽之友社，36-37，2007